

こう えん えんゆうじゅく れきし こんご かだい
講 演 「遠友塾の歴史と今後の課題」

さつぼろえんゆうじゅく れきし ちゅうしん こんご けいいち
～札幌遠友塾の歴史を中心に～ 工藤 慶一

じょうない さつぼろえんゆうじゅく しゅうねんきねん もじ
(場内スクリーンに札幌遠友塾25周年記念の文字)

プロローグ さつぼろえんゆうじゅく たんじょう あんない ねん あべのぶこ
札幌遠友塾の誕生 案内は3年スタッフ阿部伸子さん

かんり じゅけんせんそう むえん ほんとう きょういく めぎ さつぼろ しみん らいげつ どうないはつ
「管理や受験戦争とは無縁の本当の教育を目指して、札幌の市民たちが来月、道内初の
じしゅやかんちゅうがく さつぼろえんゆうじゅく ひら せんそう ひんこん がっこう まんぞく かよ ひと
自主夜間中学「札幌遠友塾」を開く。戦争や貧困で学校にも満足に通えなかった人たち、
さいきん ふ どうこうきよひ こども はばひろ とも まな こうりゅう ば けいかく どうきょう
最近増えている登校拒否の子供など幅広い世代が共に学び、交流する場にする計画。東京
おおおさか こうりつ やかんちゅうがく みんかん じしゅうんえい ぜんこくてき かず すく おお きたい
や大阪には公立の夜間中学があるが、民間の自主運営は全国的にも数が少なく、大きな期待
が寄せられている」

いま ねんまえ さつぼろえんゆうじゅく ほっそくじ ほう しんぶん きじ ねん
これは今から25年前、「札幌遠友塾」発足時に報じられた新聞記事です。1990年といえ
ば「バブル崩壊の1年前」、まだ「拓銀」もありました。大量生産大量消費の時代でした。
ほうかい ねんまえ たくぎん たいりょうせいさんたいりょうしょうひ じだい
そんな中、「札幌遠友塾」が船出したのです。
なか さつぼろえんゆうじゅく ふなで

ふなで ねんまえ きょうし かいしゃいん しゅふ たさう かたち だくしょかい
またこの船出には、その3年前から教師や会社員、主婦など多数の方達による「読書会」
を立ち上げ、「多くの問題を抱えている教育を何とかしたい」と準備を進めてきたのでし
た。そして、1990年4月、100名を超える希望者が集まり「札幌遠友塾・自主夜間中学」が
しゅつぱつ
出発したのです。

せつりつとうしよ えんゆうじゅく かつどう こんご けいいち しょうかい
では、設立当初からずっと遠友塾の活動をされてきた「工藤慶一さん」を紹介します。

えんゆうじゅく なまえ ゆらい
1. 遠友塾の名前の由来とスローガン

みな はくしゅ
皆さん、こんにちは (拍手)

わたし ねん しょうわ ねんあさひかわ う せんじつ さい たんじょう び むか えんゆう
私は1948年、昭和23年旭川で生まれました。つい先日67歳の誕生日を迎えました。遠友
じゅく じゅぎょう ほん とし さい ねん ねん ねんかん さつぼろえんゆうじゅく
塾の授業が始まった時は40歳でした。1996年から2010年までの14年間、札幌遠友塾の
だいひょう つと げんざい ねん ほっかいどう やかんちゅうがく かい
代表を務めていまして、現在は2007年にできました「北海道に夜間中学をつくる会」の
だいひょう
代表をしております。

この記事は、1990年4月遠友塾が開講する直前に出た3月25日の北海道新聞の朝刊です。この日はちょうど日曜日でした。この記事の右側にイラストが載っていました。この記事のおかげで、正直いって朝の5時、私達がまだ寝ていたんですが、もう電話が鳴りやまずということになりました。

札幌遠友塾という名前は、明治27年から昭和19年まで50年間続いた「遠友夜学校」という学校の名前から頂いております。「遠友」という意味は論語に出てくる「朋あり遠方より来るまた楽しからずや」という言葉からきていますが、遠い人とも、あるいは知らない人とも皆なかよく

やっつけていけるという意味を持っています。そしてスローガンである「学ぶことが生きることの証と喜びになる」と言う言葉は、これは遠友塾の読書会を主催した、お亡くなりになった牧野金太郎先生の書いた文章の中に、遠友夜学校に通っていた人たちにとって「学ぶことが生きることの証と喜びになっているように思える」という文章がありましたので、遠友塾設立の時からこの言葉をスローガンとして掲げています。

2. 忘れえぬスタッフ

それでは次に、たった1枚残っている開講式の時の写真です。これは1990年の4月29日、現在の道警本部のある建物、あそこに昔「札幌市青少年センター」という建物がありました。そこで開講式を行ったわけです。この時の遠友塾代表が、新川高校

の教員を勤めていた後藤鎮義さん、事務局長が札幌市の小学校の事務職員をしていた馬場克明さん、それと私と3人で事務局員という名前をつけて活動してきました。当日、私は左端にいますが司会を担当しました。もちろん若いですが、25年前ですから(笑)。残っている写真の中で「開講式」の写真は、これたった1枚しかないのです。



えらふじお かいこうしきかいじょう いす はこ
・江良富士男さん～開講式会場の椅子をトラックで運ぶ

ひだり ばんめ かつ かた かつ えらふじお かつ わたし かつ はなし はじ
左から3番目の方、この方は江良富士男さんという方です。なぜ私がこの方から話を始めようと思ったかという、この方、実は1996年7月に49歳でガンのために亡くなりました。亡くなるまで遠友塾のことをずっと思い考えていました。この開講式の時、実は突発的に大変な問題が出てきたんです。椅子の数が足りなくなりました。あまりの人数にですね。それでとっさに江良さんが自分の会社に行って、会社のトラックに椅子を数十脚積んで会場に運び入れたんです。このような事は皆さんあまりお分かりにならないかもしれませんが、実はそのようなことがあったのです。



いまこんえいいち すうがく えんゆうじゅく すく
・今紺映一さん～数学のプリントが遠友塾を救う

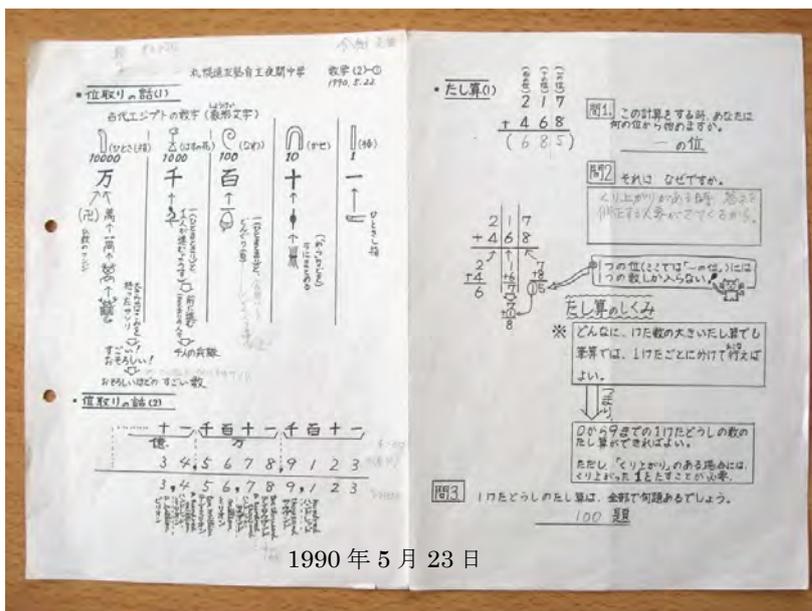
つぎ わす つぎ かつ しょうかい しゃしん とうじかいじょう
次に、忘れえぬスタッフとして次の方を紹介いたします。この写真は当時会場にしていた札幌市民会館の2階の1号室です。この真中のメガネをかけている方が今紺映一先生、その左側にちょっとワルガキが立っています。実は私の息子であります。私の息子の小学校5、6年の時の担任が今紺先生です。参観日などを通じて彼の授業を見た時に、もしかしたらこの人だったら、という思いがありまして、勧めてみたところスタッフとして参加してくれたのです。



じつ かつ ねんかいこう ねんご がつ な とく きせい きせい かつ
実はこの方1990年開講から4年後の4月にガンで亡くなりました。特に1期生と2期生の方には思い出深い先生です。それにはいくつかの理由があるんですが、今紺先生は数学を担当しました。その時、今紺先生が使ったプリントをお見せします。

これは数の読み方、それから
たし算の勉強、5月23日でした
かその日の1期生の授業として
行われたものです。1期生の方、
今日も来ておられますが、覚えて
おられないかもしれないけど、
このようなプリントを使っていた
わけです。

実はこの数学のプリントが
遠友塾を救うことになったん

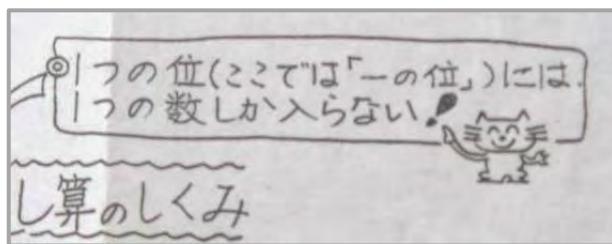


1990年5月23日

です。それはなぜかという、当時、札幌市民会館の場所を確保するために、何月何日どこ
どこの教室を確保するという抽選会に出ていたんです。それで1990年夏の抽選会に出た
ところ、檀上から市民会館の係長さんが「遠友塾さん、ちょっと来てください」と言わ
れて行ったら、このような事を言いました。「遠友塾さん、新聞記事を見ると月に受講料
1500円もらっているでしょ。ですから会場費3倍になります」確かに規定を見ると3倍に
なる。それは営利目的で使ってはいけないという意味だったんです。ところがもしもその
当時、遠友塾の財政からいって、色々計算してみると、2年間で遠友塾の金庫が空になる
というのが判りました。それで担当の係長さんをお願いに3度伺いました。最初は規則だ
からの一点ばりです。「あー規則だ」「いや何とか」「規則だ」「いや何とか」と話してい
る時に、ちょっと雰囲気を変えようと思って、今紺先生の使っていた数学のプリントをお見
せしたんです。そしたらですね、私ハッキリ覚えているのは、その係長さんの顔つきが変
わったんです。あれは不思議な瞬間でした。そうして「ちょっと待ってくれ。検討する」
それでその後どうなったかという、
「料金は今まで通りでいいよ」と言ってくれました
し、さらに、その後電話が来まして「遠友塾さん、抽選会に出なくていいから。札幌市の
行事を入れた後に抽選会やるけど、その間に教室うめてあげるから来なさい」という事が
あったんですね。もしその時に今紺さんのプリントがなければ、規則でおそらく押し切られ

たろうと思^{おも}ます。ですからこの今^{いま}紺^{こん}さんの数学^{すうがく}のプリントが、実^{じつ}は遠^{えん}友^{ゆう}塾^{じゅく}を救^{すく}ったということになります。

それとちょっと^{かくだい}拡大^{かくだい}してください。ここに「ネコちゃん」がいますね。今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}は学^が級^{きゅう}通信^{つうしん}等^{など}でも、このネコちゃんを書^かかないと、うま^いく書^かけないと言^いっていました。それで



プリントにはネコちゃん^いを入れる。こ^いう^いう^いプ^いリ^いン^いト^いが^い続^いいて^いいた^いん^いです^いね^い。それで彼^{かれ}が1994年^{ねん}に亡^なくな^なった^な後^{あと}、引^ひき^ひ継^ひいだ^ひ数^{すう}学^{がく}科^かの^とス^とタ^とフ^とフ^との^と取^とり^と決^とめ^とで、今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}の^いし^しの^し志^しを^つ継^つご^ごう、その^{えん}た^{えん}め^めに^{すう}遠^{えん}友^{ゆう}塾^{じゅく}の^{すう}数^{すう}学^{がく}の^かプ^かリ^かン^かト^かには、必^{かな}ず「ネコちゃん」を^い入^いれ^いよ^いう^いと^き決^きめ^めま^まし^した^た。皆^{みな}さん^おわ^わか^かり^りか^かな^なあ、ど^{すう}の^か数^{すう}学^{がく}の^かプ^かリ^かン^かト^かに^も必^{かな}ず^{はい}ネ^{はい}コ^{はい}ちゃん^{はい}入^{はい}っ^{はい}て^{はい}い^{はい}ま^{はい}す^{はい}よ^{はい}。それ^はは^は25年^{ねん}経^たった^{いま}今^{いま}でも^{いま}そ^{いま}う^{いま}な^{いま}ん^{いま}です^{いま}よ^{いま}。

それから今年^{ことし}3月^{がつ}にある^{かた}方^{でんわ}から電話^{さんじょかいりん}が^{さんじょかいりん}き^{さんじょかいりん}ま^{さんじょかいりん}し^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}。 「賛^{さん}助^{じょ}会^{かい}員^{りん}に^{さんじょかいりん}な^{さんじょかいりん}り^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}ん^{さんじょかいりん}で^{さんじょかいりん}す^{さんじょかいりん}」 め^{さんじょかいりん}つ^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}に^{さんじょかいりん}な^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}電^{さんじょかいりん}話^{さんじょかいりん}で^{さんじょかいりん}す^{さんじょかいりん}。 受^{じゅ}講^{こう}生^{せい}に^{さんじょかいりん}な^{さんじょかいりん}り^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}、 あ^{さんじょかいりん}る^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}は^{さんじょかいりん}ス^{さんじょかいりん}タ^{さんじょかいりん}フ^{さんじょかいりん}に^{さんじょかいりん}な^{さんじょかいりん}り^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}と^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}う^{さんじょかいりん}電^{さんじょかいりん}話^{さんじょかいりん}は^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}く^{さんじょかいりん}さ^{さんじょかいりん}ん^{さんじょかいりん}き^{さんじょかいりん}ま^{さんじょかいりん}ま^{さんじょかいりん}す^{さんじょかいりん}が、賛^{さん}助^{じょ}会^{かい}員^{りん}に^{さんじょかいりん}な^{さんじょかいりん}り^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}と^{さんじょかいりん}い^{さんじょかいりん}う^{さんじょかいりん}方^{かた}は^{さんじょかいりん}め^{さんじょかいりん}つ^{さんじょかいりん}た^{さんじょかいりん}に^{さんじょかいりん}あ^{さんじょかいりん}り^{さんじょかいりん}ま^{さんじょかいりん}せ^{さんじょかいりん}ん^{さんじょかいりん}。 その^り理^り由^{ゆう}を^き聞^きく^きと「実^{じつ}は今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}に、月^{つき}寒^{さむ}小^{しょう}学^{がく}校^{こう}で^おせ^おわ^わに^なつ^たた[。]私^{わたし}が^く苦^くしい^{とき}時^{とき}に^{せんせい}先^{せん}生^{せい}が^た助^たけ^たて^てく^れた[。]その^おお^かげ^がで^今今^{いま}の^{わたし}私^{わたし}が^ある[。]」と^いい^う大^お人^とに^なつ^た方^{かた}から^{でんわ}電^{でん}話^わが^きま^した^んで^す。 「今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}ど^うし^てい^るか^な？」と^おも^いっ^てイ^んタ^ーネ^ーツ^でで^しら^べた^ら、札^{さつ}幌^{ぼろ}遠^{えん}友^{ゆう}塾^{じゅく}の^ホム^ペー^ージ^が出^でて^きた[。]それ^で今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}が^な亡^なくな^なつ^たと^いい^うこ^とが^わか^つた[。]それ^で先^{せん}生^{せい}の^{おんがえ}恩^{おん}返^{がえ}し^に私^{わたし}は^{さんじょかいりん}賛^{さん}助^{じょ}会^{かい}員^{りん}に^なり^たい^です[。]」と^いい^うお^{でん}電^わ話^でし^た。 ですから今^{いま}紺^{こん}先生^{せんせい}が^な亡^なくな^なつ^たて²¹21年^{ねん}た^つて^いま^すが、彼^{かれ}は^な亡^なくな^なつ^たあ^とも、な^おも^も遠^{えん}友^{ゆう}塾^{じゅく}を^おう^{えん}援^{えん}し^つづ^けて^いま^す。 こ^うい^う先^{せん}生^{せい}が^おり^まし^た。

・富^と田^み忠^{ただ}義^{よし}さん[〜]受^{じゅ}講^{こう}生^{せい}も^{ふく}含^ほめ^たボ^ほラ^{けん}ン^{じつ}テ^{げん}ィ^ア保^ほ険^{けん}の^実現^{げん}

それ^では^{つぎ}次^{わす}の^{つぎ}忘^{わす}れ^{わす}え^ぬス^タフ^をを^{……}

ついで^いに^い言^いい^ます^とこ^れは²⁰¹⁰2010年^{ねん}の^{クラ}ス^ス
発^は表^つ忘^{わす}年^{ねん}会^{かい}の^ば場^ば面^{めん}で^す。 真^ま中^{なか}の^{だん}男^{せい}性^{せい}、21期^き生^{せい}の^おく^たに^か奥^{おく}谷^{たに}さん^とい^う方^{かた}で^すが、こ^の日^ひ、男^{だん}性^{せい}の^{じゅ}受^{こう}講^{せい}生^{せい}
は^{みな}皆^いの^{けん}意^{じょ}見^{そう}で^{じょ}女^{わら}装^いさ^せら^れて^いる[。] (笑)



一杯ひっかけて会場に来たんですね。でその左側にいる方、この方が富田忠義さんという方です。富田さんは長年社会科のスタッフ、並びに21期生のクラスチーフとして活躍されましたが、2013年の12月にお亡くなりになりました。享年70歳です。この富田さんは実は2012年4月から7月まで代表代行をしてくれました。非常に尽力をしてくれたんですが、この方にやって頂いた大きな仕事が実はあります。

今私たちは遠友塾のスタッフ、受講生含めてすべて1人年間300円のボランティア保険に加入しております。しかしボランティア保険に加入することは色々な意見があって、全国的には受講生の分は認められないケースが大半です。しかし今札幌遠友塾は、スタッフも受講生も、1人年間300円の保険で安全を確保しています。それがなぜできたか？彼が社会福祉協議会はもちろんのこと、保険会社代理店、並びに保険会社と交渉した結果として、全国的にも札幌遠友塾だけが、今そのような恩恵を受けています。全国の自主夜間中学、並びに識字教室、フリースクール含めてこのようなことを今まで色々聞きましたけど、どうもやっていないようです。なぜボランティア保険が受講生がだめなのか、受講生はスタッフじゃないからという理屈なんです、片方でスポーツ保険ならいいよ、というんです。年間1人900円です。スポーツやらないのにスポーツ保険ならいい、何か訳の分からない理由でだめだ。そこをですね、私達は引かずに交渉を重ねて、そのようなことにいたっています。今この動きを何とか全国の識字教室、自主夜間中学、フリースクールにも適用できるように厚生労働省と交渉していきたいと考えております。このようなことがありました。

3. 忘れえぬ受講生～遠路通われた方達

では次に忘れえぬ受講生。たくさんの方がおりますが紹介します。

・釧路から通われたご夫婦

この方は釧路から通われたご夫婦です。1999年に7期生で卒業されました。私が驚いたのは、入学式の時にリュックサックをしょって来まして、始まる直前にヒョットといなくなっと思ったら、あの結婚式の時に使う礼服で入って来たんです。

そうして長距離の夜行のバスで家に着いたら朝の5時になりますと言っていました。このことを全国夜間中学校研究大会で発表した時、全国の夜間中学生、並びにスタッフはビックリしていました。

旦那さんはお亡くなりになりましたが、右側にいる矢本光子さんの卒業文集がありますので阿部さんに朗読してもらいます。

釧路↓札幌 夜間中学へ夫婦



毎水曜日の夜、約60年ぶりの授業に聴き入る。自宅のある釧路市から、「学校」が開かれる札幌市民会館まで特急で往復10時間近く。だが、道程の長さは苦でない。夫婦で机を並べ、「同級生」に会えるのが楽しんだ。

矢本信夫さん(68)と光子さん=写真。戦中戦後に就学がままならなかったかつての児童生徒が集う「札幌遠友塾自主夜間中学」。夫

妻は、3年課程の1年目。年明け最初の授業があった22日は、数学で小数を学んだ。グラフづくりは「いやあ、難しかった」と苦笑いの信夫さんだが、学べること自体がうれしい。

2人とも小学校に1年行っただけで、農家の子守などの奉公に出た。「貧しくてね。学校どころじゃなかった」

太平洋戦争の嵐を生き、2人の子供も独立して、学びの舎に。「先生もほかの生徒も温かくて。今が青春。生まれて初めてですよ、こんなにいい人たちに囲まれて」と光子さん。

毎日、そろって自宅近くを1時間ほど散歩する。びったり寄り添って暮らした。和がいいんですね、と声を掛けたら、「いつもけんかしてばかりよ」と、顔をしかめた光子さん。戦中派の照れ隠しらしい。

1997年1月30日 朝日新聞

第7回 卒業文集 福寿草より 「私の思い出」 矢本 光子



平成8年4月24日、札幌市民会館、遠友塾夜間中学の入学式を迎えました。私は、初めてのことでしたので、緊張と不安でいっぱいでした。

家が貧しかったので、小学校も1年生しか行っていませんでした。字もろくろく書けませんので、いつか、勉強したいと思っていましたところ、娘が新聞をもってきました。「遠友塾夜間中学で生徒を募集しているから、申し込もう」「今すぐ申し込

むからね。入学できるといいね」。娘たちや孫たちがみんなで言ってくれました。

娘たちから、毎日「まだ返事こないかい」という電話がきました。私より娘の方が楽しみに待っていましたところ、遠友塾夜間中学からの手紙がきました。私はさっそく娘に電話をしました。「遠友塾夜間中学からの手紙がきたよ」。娘から「いますぐ行くからね」。

私が待っていると、娘がきて手紙をあけてみて「じいちゃん、ばあちゃん、いい返事がきたよ。良かったね」。孫たちからも「じいちゃん、ばあちゃん、おめでとう。勉強がんばってね」。

入学の日、私の名前が書かれた名札を、初めて胸につけた時の喜びは、今も忘れません。ところが、5月8日初めての授業が、数学と国語でした。肩にも頭にも力が入ったまま、何がなんだかさっぱり分からないうちに2時間が終わりました。

中央バスターミナルに着くや、疲れと、「私にはついていけない!!」という思いで「じいちゃん、今日でやめるしかないね」。するとじいちゃんは「そうだな。おらたちのくるところではないな。」せっかくの子供たちの好意を無駄にするみたいだけど、仕方ないねとやめることに気持ちは固まっていたのです。家に帰って馬場先生にやめたいと言うつもりで電話しましたが運よく留守でした。

そのことを娘に言ったところ、「たった1回の授業で諦めるなんてあんなに夢見て入学したのだから、もう少しがんばってみなさい」と娘に怒られた。

「じじ、ばば、がんばれ」

こうして学校生活が始まりました。先生も一生懸命、一つでも覚えてもらいたいと熱意が伝わってきた。汗を流しながら教えてくれる顔を見ていたら、私もがんばらなくちゃ。

クラスみんなの笑顔に支えられて「暖かい輪の中にいるよ
うだね」と二人で話をしていました。

私がんばるぞう。



・遠路通われた受講生の想いを受け、道内各地にひろがる夜間中学

お二人とも小学校に1年行っただけで、農家の子守などの奉公に出ました。のちに旦那さんは、太平洋炭鉱で働きました。卒業の時、ご夫婦に約束したことがあったんです。“釧路に夜間中学つくるからね” なかなか実現しませんでした。2009年釧路に自主夜間中学「くるかい」が設立されました。10年早ければという想いがあります。

こういう方はまだいますよ。2007年に卒業された滝口さん、この方は函館から3年間無欠席で通いました。そしてその2年後、函館遠友塾が設立されたわけです。もちろん1期生の時、すなわち1993年の卒業の中には旭川から通われた坪岡さん、風連から通われた川真田さんがいましたが、15年後旭川遠友塾が設立されました。それから今年3月卒業さ

れた大内理詩さんは室蘭から通って来ました。でも室蘭には遠友塾がありませんので、これからの設立目標ですね。大内さん、ちょっと手を上げていただけませんか？ 皆さん大内さんに拍手してください。（拍手）

札幌市民会館での最後の卒業式

では次にいきましょう。

この写真は2007年の卒業式の記事です。3月22日に記事が載りました。この記事は私が遠友塾の話をしてくれという講演の依頼があった時、必ず使う写真です。この真中の笑顔

の方、実は今日来ておられます。そこにいますよ。近藤朝子さんです。それから左端の方、山本孝子さんです。中国から来ました。その右側が高島秀子さんという方で、山本さんの娘さんです。中国語はしゃべることができましたけど日本語は大変でした。さらに妹さんが遠友塾に入ってきてまして、今この会場にいます。山本香里さんです。香里さんどこにいますか？（拍手）それから近藤さんの右側にちょっと丸い顔の方、川名花子さんという方です。この方たちに共通しているのは戦争です。すべて戦争というものによって自分の学びを奪

れてきました。それで遠友塾にきたわけですが、戦争は絶対最大悪です。子供の学びを失わせます。そして戦後になってもその保障をすることはなかったわけです。やはり平和が一番大事だと思えます。それからもうひとつ、この期日2007年の3月、実はこの卒業式の時に、この卒業式をもって札幌市民会館は閉鎖になりました。いよいよ遠友塾の苦しみが始まっていたのです。



ナレーション 市民会館閉鎖から向陵中学校へ

案内は3年スタッフ阿部伸子さん

2001年の末に、札幌市は市民会館の改築構想を打ち出しました。その結果、改築後の教室

確保が不透明になったのです。札幌市

教育委員会に問い合わせますが「どうなるかわからない」とのことでした。

その後、先行不明のまま、2006年まで

市民会館で、2007年からは「教育文化会館

で授業を行いました。同時に、増加する

受講生や、安定した教室確保のため、

札幌市と協議を重ねてきました。そして

2009年から現在の向陵中学校での授業

が認められ現在にいたっています。

4. 教室確保の取り組み

2002年の新聞記事によって、私達は初めて5年後に札幌市民会館が耐震構造の問題で

閉鎖になるということを知りました。それで「市民会館がなくなった後に、私達はどの場所で学んだらいいのだろうか」という問題がわき起こりました。この間、2003年には市民

会館の代わりになる場所を確保してほしいという要望書を札幌市教育委員会に提出しま

した。そして2005年には当時の上田札幌市長が遠友塾を見学してくれました。そして2006年、代替場所としてこの場所、教育文化会館で行うということに、とりあえず決まったわけです。

ここでも実は問題がまた出てきたわけです。市民会館では週1回水曜日、4つの教室を使

って60万かかりましたが、ここは年間110万、しかも1年前先予約、先払いだと、こういう事がありまして、なんとかおねがいを、料金は半額、支払いは前の月でいいことになり

ましたが、その時に私達を感じたのは、そのままいったら僕たちは一体どうなるのだろう、

常に教室の場所の確保をめぐってフラフラフラと不安定のままではいかなければならないの



か。維持するだけでも先程のような問題が出てくるのだから、もっと何とかならないだろうか。そうだ、「学校の教室を使わせてほしい」というお願いをしよう、ということになりました。

それで、2007年に「北海道に夜間中学をつくる会」という会を立ち上げるわけですが、私達は沢山の色々な人たちに要請をしました。弁護士会の方、議員の方、等々。もちろん私達自身も札幌市長や教育委員会の方々に手紙を書きました。もちろん賛助会員の方で書いてくれた方もありました。これが当時の上田市長にあてて書いた「じっくりクラス」の太田繁雄さんの字です。

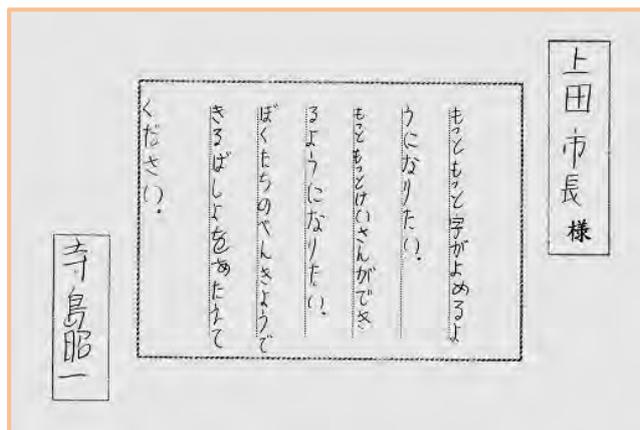
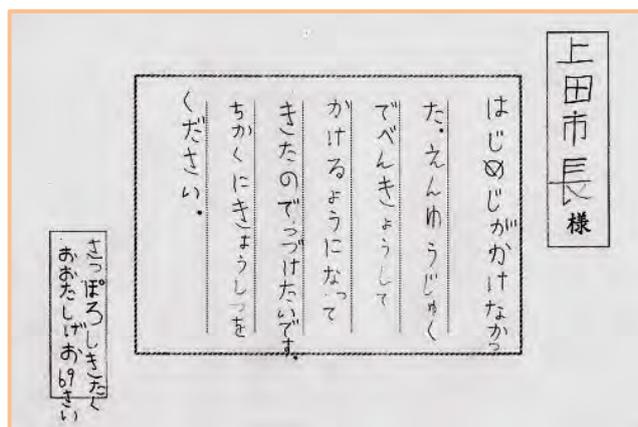
「はじめじがかけなかった。えんゆうじゅくでべんきょうして、かけるようになってきたのでつづけたいです。ちかくにきょうしつをください」

次も同じ「じっくりクラス」の寺島さんが書いたものです。寺島さんどこに座っていますか？ あ、また隠れているな。(笑) これは寺島さんが直筆で書いて市長に送ったものです。「もっともっと字がよめるようになりたい。もっともっとけいさんができるようになりたい。ぼくたちにべんきょうできるばしょをあたえてください」

実は沢山の受講生が手紙を書きました。それで色々な方のお力はもちろんのこと、

受講生自らがこのようなお願いをして、それが実は札幌市の心に響いたようです。それがまず向陵中学校で教室を使わせて頂く一番大きな力となりました。しかし色々な紆余曲折がありました。

先ほど言いました様に教育文化会館に決まった時の半額減免、それから支払時期について、それひとつでも大変な思いをするわけです。これは授業を維持するのとは別に、色々な



市民の人の参加を得て行政と話し合いをする「北海道に夜間中学をつくる会」という会を別
に作って、条件整備を目指そうということになりました。それでこの時に五項目の要望を市
と道に上げました。

1つめ、遠友塾のような自主夜間中学に対する支援。

2つめ、全道にある自主夜間中学のセンター校の役割を果たす公立の夜間中学を札幌開設
すること。

3番目、小中学校への大人の受け入れ。

4番目、自宅から出られない人達のための訪問教育の実施。

5番目、市立病院や区役所などに書いてある難しい漢字にひらがなをふること。

こういう五つのお願いを上げて現在もその活動を続けています。

しかし、その活動の流れの中で2007年10月に札幌市議会に陳情書を出しました。「義務
教育を受ける機会が実質的に得られていない人たちへの修学保証についての陳情書」と
いう長い名前です。これが札幌市議会の文教委員会にかかりまして2008年1月、私が陳述
をさせて頂きました。この時、超党派の文教委員会の議員の方たちが、遠友塾の立場に
たって札幌市の教育委員会に質問して頂きました。実はこの時の人とのつながりの中で、
今も議員の方達にお願いしているところです。

・たくさんの方々の応援で向陵中学での授業が実現
(スクリーンを見て)途中ですよ、これ。2008年5月
には使える空き教室はないという記事です。どうしま
す? ここで「空教室でなくていいから週に1回夜を
想定した授業という具体的な条件で調整してほし
い。場所は大通駅を起点として地下鉄4つの駅の範囲
の中でさがしてほしい。」という要望をしました。

そこで、当時の北原教育長、並びに向陵中学校の
佐藤校長、小原教頭、それから地域の町内会の方、

2008年5月15日
北海道新聞

PTAの方、すべて力を貸してくれました。私うれしかったのは町内会の副会長の方が、まだ決まっていなかったのですが、「もし市教委が向陵中学校を使わせないという決定をしたら、今度町内会が市教委に交渉しに行くから」という言葉まで頂きました。PTAの方も協力してくれました。それから佐藤校長は「今の向陵中学校の生徒にとって遠友塾があって、そこで学ぶ人達を見ると、なぜ学ぶのかということが、とってもいい勉強になるはずだから」という志をお持ちでした。

この結果、これは2009年の2月21日の北海道新聞の記事です。

いよいよ教育委員会の許可がおりて向陵中学校を使わせて頂くことになったので、4月からですね。2月に職員会議に伺って挨拶をしたら、突然、突然ですね、皆さんご存知の遠友塾の看板をプレゼン



トしてくれたんです。驚きました。まったく想像していなかった。この看板、いま向陵中学校の私達が入る玄関の所に貼ってある看板ですよ。で、この看板を作ってくれたのは向陵中学校の当時の“高橋正幸”先生です。それから遠友塾という題字を書いてくれ



た人は、当時栄中学校におられた“競和之”校長先生です。それでこの看板を渡して頂く時に「私たちの感謝と励ましの気持ちです」と看板を渡して下さいました。私はこの時とつきに思ったのは、今までけっこう苦しかったんですけど、こうやって人の世の中のあたたかさに触れた時、涙があふれて止まりませんでした。カッコ悪いですが、私泣いていますから（笑）

これは4月に授業するようになって、教材置場にかかげられる看板です。ここでも記事になりました

た。この右側におられる方が当時の小原教頭先生です。現在、校長先生をしておられます。

この記事の中で、当時 車椅子で通っていたじっくりクラスの伊藤フサ子さんがこんなことを述べています。「生まれつきの小児マヒで家が貧しく学校に行く機会がありませんでした。学校の机で勉強するのが夢でした。校門をくぐって通学できるということがとてもうれしい」と述べられました。また小原教頭先生は「遠友塾には全日制に対する定時制とというような形で使ってもらおう。交流も進めたい、遠友塾の皆さんから我校の生徒たちも学ぶことが多いと思います」と。そしてその翌年でしたか、今遠友塾の掲示板が向陵中学校の教室の前の廊下にあります。そこで私がちょっと貼っていた記事を見ていた時に、中学3年の男子生徒が私の方に来ました。何を言ったか「私スタッフになって向陵中学校にもどってきます」そういうことを言ってくれた男子生徒がいたんです。今日、実は後で発表する遠友塾のスタッフは、その彼ではありませんが、向陵中学校出身の方が発表しますので楽しみにしてください。

5. 夜間中学の広がりこれから

次に“夜間中学校の広がりこれから”ということで、やはり 2009年4月の記事です。

この顔の人はどなたか判りますか？ 函館

遠友塾の今西さんです。今西さんは札幌

遠友塾のスタッフをしまして、そして

函館の方に行って「作るからね」と言ったんです。そしたら本当に作ったんです。函館

遠友塾を立ち上げたんです。そして続々と。

しかしまだまだ行政サイドの考え方はまだまだ、もう一歩のところでありました。それから先ほど言ったように夜間中学をつくる会の五つの要望の中で実現したこともありました。これは今日も来ております「じっくりクラス」の浅野京子さん。浅野さんどこに座っていますか？（浅野さん立つ、拍手）



2009年4月15日 北海道新聞

あさの えんゆうじゅく いったんそつぎょう
浅野さんが遠友塾を一旦卒業して、また

「じっくりクラス」に入り直したんですが、
しょうがっこう べんきょう きかい めぐ
小学校で勉強するという機会に恵まれました。これは遠友塾が教育委員会にお願い
して実現したものです。川北小学校に1年
ちか つうがく こども なか
近く通学いたしました。こういう子供の中で
あさの て あ ぼめん
浅野さんが手を上げている場面、こういうこ
とも一部ではありますが、ひとつ実現しております。

ほっかいどう ひろ まな ば みちか
北海道はとても広いです。学ぶ場が身近
ないと通うことができません。あるいは身近
にあっても、ひざ わる ある
膝が悪いとか、歩けないという
ことになると通うことができません。

やかんちゅうがく つく つうがくじょうけんとの
夜間中学をたくさん作って、通学条件 整
て、例えば福祉タクシーなどを使って送迎するとか、それから学校の設備もエレベーターを
そな じょうけん せってい い ほっかいどうぜんいき まな ば ほしやう
備えるとか、いろんな条件の設定を入れて、はじめて北海道全域にわたる学ぶ場を保証で
きるわけです。

わたしたち ぜんこくやかんちゅうがくこうけんきゅうかい ぜんこく やかんちゅうがく せんせい まいとし
そこで私達は全国夜間中学校研究会の全国の夜間中学の先生スタッフと、毎年のように、
あた ほうりつ つく まな ぼ ほしやう うご はじ いろいろ
新しい法律を作って学ぶ場を保証しようという動きを始めました。色々なことをやったん
ですが、うまくいかなかったからです。実は60年前の第1回全国夜間中学校研究京都大会
ほうせいび けつき きいど ねん がつ けつき こっかいぎいん たい はたら
で法整備の決議はしておりますが、再度2009年12月に決議をして国会議員に対する働きか
けをはじめてみました。2012年、13年、14年と毎年8月の初旬に国会の議員会館で、沢山の
こっかいぎいん かた まじ しゅうかい おこな
国会議員の方を交えて集会を行いました。



戦中戦後 病気で通えなかった心残り 今

77歳の小学1年生

■札幌の主婦・浅野さん■

「読み書きを」市教委に思い訴え

夜間中学卒業

「本心に幸せ」

ことしは がつ おこな ひだり
今年6月4日に行いました。この左から
ばんめ わたし すわ わたし はなし いただ
2番目に私が座って、私も話をさせて頂
きました。基本はまずですね、学校教育の
ねんれいじょうこう き むきやういくねんれい
年齢条項ですね。義務教育年齢というの

は6歳から15歳まで決まっているので、後はダメということなんです。しかし、それがいいよ年齢を関係なく、国籍も関係なく、しかも国も地方公共団体もそうした活動をするのは責務として財政措置も講ずるという法案です。ただ法案としてはフリースクールと一緒にありますので、ちょっと今難航しておりますが、次から次から文部科学省の方で新しい方針を出してきています。例えば今まで公立の夜間中学には形だけの卒業証書をもたらちゃったという人は入学できませんでしたが、7月30日の通達でこれから入学できるようになりました。それから自分が卒業証書をもたらたかどうか分からないという人も入学できるようになりました。こういう流れがどんどんきていますし、来年度の文部科学省の概算要求では夜間中学関連予算として約1億円計上という記事が載っています。去年は年間300万、今年1000万、いよいよ来年は1億円ということです。このように事態は進んでいます。

そこで札幌遠友塾のお願いとしては、公立夜間中学ができたとしても、遠友塾を経由した人の中で、体力的年齢的あるいは様々な事情で通うことができない人もいるだろう。その人たちの義務教育修了の資格が得られないかどうか、今働きかけをしているところです。市教委、道教委、それから文科省にも働きかけをしているところです。まだ時間がかかりますが、「生きてて良かった」と感じて頂けるようにしたいのです。

最後に、先日賛助会員で私の友人、東京にいる平田さんという友人からメールを頂きました。彼は実は数年前に交通事故で半身不随になりましたが、20年の集いの時は出てくれたんですね。こんなメールをくれました。「5年前の20周年に参加させて頂いたことが思い出されます。受講生の皆さんが堂々と発表している様子、ボランティアスタッフの方々の皆さんをサポートしている様子、新鮮なものでした。本来であれば出席したいのですが…」このように25年間この活動を賛助会員として支え続けてくださった方がけっこう沢山いるんです。ですから札幌遠友塾の受講生・同窓生・スタッフの皆さん、決して自分たち一人だと思わないでください。このように支えて下さる方がいますし、この方達も必ず応援してくれています。

5期生の森静枝さんという方がいました。満州から引き揚げてきた方です。この方が卒業した後に、私に手紙をくれました。「遠友塾のことは忘れがたく、胸の内にだきし

めて生きてまいります」という言葉です。これからは、私がこの森静枝さんの言葉を受けて、森さんの言葉をだきしめて、これから北海道の学ぶことに幸の薄かった人たちと共に一歩でもいいから前に進んでいきたいと思ひます。

ありがとうございました。(拍手)